

消化管画像診断学は、切除標本の肉眼所見および顕微鏡所見と画像所見との対比により発展してきた経緯がある。画像診断学の理解を深めるには、画像所見と切除標本の病理所見との対比を行うためのできる限りの適切な取り扱いを実践すべきである。切除標本(病理検体)の正しい取り扱いを知り、関心領域をうまく病理標本化するためには、病理医との意思疎通が重要である。一方で最近の内視鏡装置、内視鏡診断の発展は著しく、拡大内視鏡や画像強調内視鏡の普及により、詳細な組織構築を反映した内視鏡診断が行われており、臨床画像に対応できる病理所見の把握が病理医には求められている。

そこで、本号では切除標本の取り扱いや病理所見との対比の方法について、基本的な作法を踏まえながら、工夫やこだわりを交えて解説いただいた。臨床と病理、双方の立場のマリアージュにより、現在の高いレベルの画像診断学が成り立っていることが再認識できる号になると期待される。

本来本号は、暑い夏に気軽に読むことができる特集号として企画されたものである。画像診断の神髄である画像対比の特集を、本質を突いた語彙ではあるが、「マリアージュ」という見慣れぬ用語を用いたことで、長浜先生、二村先生とともに本特集のかたわれを担った身としてご批判を多数いただく覚悟で、緊張しながら原稿が集まるのを見守っていた。

序説の二村論文では、「臨床と病理のマリアージュ」というテーマは深遠であるが、動機は不純でよく、伝統という名の呪縛からも解放されて、生きた診断学を身に付けられたいことを述べている。読者および特集企画者の緊張を解いてくださっている。

主題の中野論文では、切除標本の取り扱いと肉眼像の撮影法について述べている。病理所見から肉眼所見に対して還元された知識を総動員した標本処理の精髓を示している。藤原論文では、外科切除標本の切り出し法を腫瘍、非腫瘍に分けて示した。結局、切り出しには臨床情報の収集が最も重要で、臨床と病理両者の共通認識が必要であることが見て取れる。常々美麗な内視鏡の切除標本の提示

を行っていただいている名和田論文では、内視鏡的切除標本におけるマクロ像撮影に必要な機材と撮影に至るまでの標本の取り扱いを述べている。具体的なカメラ機材の説明は非常に参考になる。海崎論文では顕微鏡写真の撮影法について、撮影前の準備から撮影時、撮影後の振り返りまで、手順に従った基本的な撮影法について示している。顕微鏡写真撮影でも撮影準備が最も重要で、ポイントは藤原論文と同様の趣旨である。岸本論文では、内視鏡像と病理組織像の精密な対比方法であるKOTO MethodおよびKOTO Method IIについて示している。内視鏡像と病理所見の対比を重要視する内視鏡医にとって、最も興味のある項目であろう。聴衆、読者に対して見せる(聴かせる)ことのスペシャリストである市原論文では、病理プレゼンテーション法について提示している。スライドの作成法だけにとどまらず、提示者の語り口や心構えにまで言及しており、いつでも病理プレゼンテーションができるような気持ちになる。臨床医の考える臨床画像と病理所見の対比では、4名の内視鏡医より臓器別に示していただいた。それぞれの臓器で疾病構成が異なり、画像所見も異なるが、病理所見に活かすための(内視鏡的)切除標本処理に対する工夫・意気込みが見て取れ、それぞれすぐに役立つtipsを有している。

最後にノートの上山論文では、拡大内視鏡のみを用いた、拡大内視鏡像と病理組織像の対比の具体的方法について述べている。対比の真の目的は内視鏡像との対比であるため、非常に理にかなった方法と言える。

以上、消化管画像診断、病理診断に熱き想いを持つ病理医6名、内視鏡医6名の先生方がご自分の標本処理法や内視鏡所見との対比方法を惜しげもなく披瀝しており、気温の高い予想のでているこの夏にさらに暑苦しいぐらいの出来栄である。検体の取り扱いからプレゼンテーションの方法までを示して、すぐにでも臨床、研究に役立つ特集は「胃と腸」誌でしか成し得ない号であり、安堵して編集後記とする。